

諸国巡礼と念仏勧めの隠居庄屋の話

高坂了心の信仰と村おこし



元就実大学 学長
柴田 一

ところは美作国英田郡南村（現美作市南）。

〔河会庄十丁谷四か村の一つで、吉野川にそぐ河会川沿いの村。家数二十四軒、人数八十五人（『新訂作陽誌』）代々この村の庄屋をつとめたのが高坂家で、戦国大名武田信玄の重臣高坂弾正の末裔という由緒ある家柄である。

元禄・享保（一六八八～一七三五）の頃の高坂家当主は高坂九郎兵衛であった。（四十年間庄屋を勤め、隠居して「宗閑」と改め、八十七歳の天寿を全うした幸せな老人）。

その孫で、祖父の庄屋役を継いだのが高坂六左衛門。「彼も三十年間村役を勤めた後、息子の与市兵衛に家督と役職を譲り、明和三年（一七六六）他界。歿年令はよく判らないが長命であったことは確かである。」これからお話するのはこの六左衛門のことである。

『高坂家系図』によると、「若年の時は昼夜共にきびしく働き、老ては仏法に帰依し」とあるから、隠居するまでは身を粉にして働いたが、隠居してからは、家業・村役共に息子にまかせ、自身はひたすら仏門に帰依したようである。

さきの『高坂家系図』によると、「寛延三年午の春、四国順（巡）礼」同年の秋、当国（美作）順（巡）礼とあるから、六左衛門が隠居したのは寛延三年（一七五〇）の頃であろう。

六左衛門は巡礼の道すがら、筆まめに『納経帳』を記しているからその足取りがよくわかる。

宝暦四年（一七五四）三月、再び巡礼を思い立ち、東（関東）百番の札所を廻り、つづいて秩父・坂東・不二山・一ノ宮・国分寺などをめぐり、同五年九月には紀州の高野山に登り、剃髪して了心と称し、つづいて坂東と西国の百番札所をめぐって同年十一月に帰宅した。

それから半年後の宝暦六年五月、伯耆・石見・出雲・安芸・備後・備前・備中・備前を廻り、翌年九月に帰宅した。それから三年後の宝暦四年（一七六〇）には、四国遍路の旅に出て、この年七月、酷暑のなかを無事に帰宅したと

いう。

この度々の巡礼の旅と共に注目されるのが、大師講・地藏講などの講の取り立てである。隠居前であろうか延享元年（一七四四）、弘法大師の縁日には、村中が仕事を休み、ご馳走を作って一日楽しむ『大師講』、また村中の女性各村のお地藏さまをまつる『女人地藏講』を興し郡中にひろめた。また真木山長福寺の本堂での百日のお籠り、薬師堂での二十一日のお籠り、春秋の杜日の行事もみな了心が始めたものだという。

このように晩年の了心は俗事を捨て、篤く神仏を敬い、信仰を村中・郡中にひろめ、村人の心の絆を強くし、村おこしに努めた。

了心には二男二女があつたが、その一人が備前国和気郡北方村の名主武元家に嫁した「はな」である。「夫の武元和七郎との間に二人の男の子をもうけた。一人は書家として有名な武元登々庵（周年）、もう一人は閑谷学校の教授で、著書『勸農策』で知られている武元君立（勇次郎）。

彼女も寺社参詣の旅が好きで『西国巡礼道之記』『出雲巡礼道之記』という俳句交りの日記を残している。

血は争えないというが本当かも知れない。



「高坂了心の信仰と村おこし」